エルビル滞在に関するレポート

日本クルド友好学生連盟　早稲田大学　藤田　晃太朗

私は八月三日から十三日にかけてイラク国内にあるクルディスタン自治政府を訪問した。本レポートでは主にクルディスタン自治政府の中枢たるエルビルでの滞在に関して述べる。

羽田空港から中国、ドバイ、ヨルダンを経由して私はエルビル国際空港へと訪れた。まず空港に訪れて感じたことは、想像以上に空港の設備や警備がしっかりしていたことである。事前に調べて紛争地域であったが街並みがきれいであることは知っていたのだが、いざ、訪れてその目で体感すると驚くものであった。また日本の空港と特に異なる点は出迎える人と訪れた人が合流する場がバスで移動した別の施設にあるところである。このようなシステムはやはりテロが多い地域特有のものであるように感じられた。そこで今回の旅のカウンターパートナーの方と合流しホテルへと向かった。

エルビル空港

ホテルへ行く途中の街並み

翌日はロタナホテル内にある日本領事館へとあいさつに伺った。そこでは滞在中に気を付けることやエルビル市内での直近の出来事に関して話を聞き、その後学生との交流に関する打ち合わせなどを行った。

森安領事と現地の方々。

その後日本で文部科学省と経済産業省にあたるところの大臣の方とお話をする機会を頂き、前者においてはクルディスタン地域では、いまだ教育制度が整っていないという点から日本の教育制度を知ってもらうため、交流を深めるため、交換留学を行うべきとの提案をした。また現状、日本人はクルディスタンのことを知らない人も多い、それがゆえに、ただ危ない場所との偏見も存在する。したがってそのような人々にまずはどんな場所でどんな人々なのかを正しく知ってもらうためにこの制度は有意義なものであると考える。後者においては、クルディスタンにはいまだに多くの難民キャンプが存在し、その多くが経済的な自立が難しい状態にあるという点から、難民キャンプ周辺に難民の方々自身で田畑を開墾しそこで働くことで食料を手に入れ、またそこで出来た余剰作物を売ることでお金を得るといった難民の方々が継続的に自立可能なプロジェクトの支援を行いたいという提案をした。どちらの提案に対しても彼らの反応は好印象であり、友好的な協力関係が築けた。これから日本においてはそれらの実現に励みたいと考えた。

その夜ホテルの近くのイスカンという夜に現地の人びとで賑わう通りへ行った。

日本でいう夏祭りの出店のように両脇に店が立ち並んでいる。飲食や電化製品から中東ではよく吸われている水たばこの店など多種多様であった。

現地は常に昼間は 40 度を超えるので夜このような場所で人々は交流するのである。彼らはとても気さくで見ず知らずの私たちに対しても積極的に関わってくれた、また道に迷って声をかけた時も片言ながら必死に英語で説明してくれるといった優しさは彼らの民族性があらわれていると考えた。またここの近くのデパートを散策しているとゲームセンターがあり、そこで小学生くらいの子供達と遊ぶ機会があった。彼らとボードフットボールを一緒に遊んで思ったことは、子供の笑顔というものは、どこでも同じであるということである。

国や民族や言語が違えど、小さな子供たちが見せる笑顔というものは変わらぬものであると、そしてそんな笑顔を見せてくれる子供達から笑顔が欠けないようにできたらと私は考えた。

翌日はクルディスタンのエルビルを中心に活動をしているＫＤＰの学生部の方々との交流があった。ここではお互い学生同士であることから学生として何ができるのかを意見交換を行った。また交換留学に関してはここにおいても提案を行い、学生同士の交流を深めていこうということになった。また私たちが日ごろ日本で在日クルド人の方々と行っている蕨市内のゴミ拾いのボランティア活動などを紹介し、国内における活動を知ってもらうことができた良い機会であった。

その後学生部のメンバーであるジゲルさんとエルビルの観光名所である世界遺産エルビル城塞（シタデル）周辺を散策した。　城塞内にある巨大な国旗

この城塞内は昔の住宅がそのまま残っておりその時代の建築様式を見ることができ、また中には博物館が存在しクルディスタンの服装や食事や絵画などさまざまな伝統や文化を学ぶことができる。城塞内を散策したのち周辺の市場を見て回った。そこは城塞を囲むようにできており、また迷路のように道が入り組んでいて雑貨店や衣服、電化製品が売られ食事もとることができありとあらゆ

るものが存在していた。大変良い場所のように感じられたが、世界遺産であるのにもかかわらずいたるところにゴミが落ちており、またゴミ箱もないという状態は少し残念に思った。こういった小さな問題一つ一つから考えていくことが必要であるとも考えた。

翌日私は前日の市場で飲んだフレッシュジュースのせいかお腹を壊してしまい、さらには脱水症状となってしまった。こちらの病院などまったくわからないなか、協会の関係者の方々が、見ず知らずの私を親切に病院まで連れて行ってくださり、また自分の家へと招いてくださった。改めてここで感謝しているということを書かせていただく。

人生二度目の点滴がクルディスタンの病院であったのだが、設備は想像以上にしっかりしたものであった。しかしながらエントランスには大量の人々が並んでおり、医師が足りていないように思われた。

今回私はありがたいことにクルディスタン自治政府に行く機会を頂き、そしてそこで今まで自分が生きてきた中でまったく触れたことも聞いたことのないものや人々に触れることができた。彼らはいま経済的にも政治的にも厳しい状況のさなかである。しかしながら、そのような状況の中でも彼らが見せてくれた笑顔や彼らの優しさというのは素晴らしい民族精神を私自身見習って行動していきたいと感じた。また彼らと協力し少しでも彼らの状況が改善されるような活動に励んでいきたい。